

株式会社大洋発條製作所（A）¹

橋本大介氏は、日本国内の需要の縮小、外注先の後継者不足といった状況の中、「これから自社にとって何が必要であるか」について、ここ数年随分考えてきた。そして、「わが社が生き延びていくためには、将来に向けての準備段階として、今から海外進出を検討すべきではないか」と思い至ったのである。

10

大洋発條製作所の沿革と事業

株式会社大洋^{はつじょう}発條製作所（以下大洋発條製作所、本社は東大阪市）の創業は昭和 17 年（1942 年）。橋本大介氏の祖父である橋本清^{せいいいち}一氏が、どの機械にもばねが使用されていることに着目して、主にばね製品を製造するために事業を始めた。「発條」とは、ばねやぜんまいという意味である。現在では資本金 8,000 万円、年商 30 億円の企業に成長している。

20 祖父と父の経営者としての背中を見て育った橋本大介氏は、現在大洋発條の専務取締役である。小さいころから車好きだったこともあり、大学卒業後、大手自動車メーカーの設計部で数年勤務していた。父である橋本裕氏（現会長）の体調不良により、大洋発條に入社したが、弱冠 34 歳ながら、その実行力と決断力には、将来の後継者として周囲からも大きな期待がかかっている。

昭和 20 年（1945 年）～30 年（1955 年）代には、板ばねを使用した紡織機の製造により、事業は好調に滑り出した。その後機械化により普及した農機具を扱い、昭和 38 年（1963 年）からは自動車産業へとシフトしていき、現在も主力事業として自動車向けばね関連部品の製造を続けている。

30

昭和 45 年（1970 年）～55 年（1980 年）には文房具のダブルクリップを開発し、最盛期の昭和 48 年（1973 年）頃には日本でシェア一位であった。当時国内ではコクヨやプラスに納品していた一方で、米国ブランドの OEM 生産も行っていた。昭和 42 年（1967 年）頃から海外への輸出を開始し、橋本裕会長（大介氏の父）も若い頃には、アメリカでの市

¹ 本ケースは株式会社大洋発條製作所の協力を得て、独立行政法人中小企業基盤整備機構企画部調査課（旧経営支援情報センター）の笠原一絵リサーチャーが、武蔵大学経済学部准教授・黒岩健一郎のアドバイスをを受けて執筆し、同課鈴木直志統括ディレクターと矢口雅哉サブディレクターの意見を参考に作成したものである。また、クラス討議の資料として作成されたものであり、特定の経営管理に関する適切又は不適切な例示をすることを意図したものではない。本ケースの著作権は、独立行政法人中小企業基盤整備機構に帰属する。（2009 年 3 月）